



—昭和大学歯科病院の理念—

患者本位の医療  
先進医療の推進  
良き歯科医師の育成

発行責任者 病院長 岡野 友宏  
編集責任者 広報委員長 高橋 浩二  
〒145-8515 東京都大田区北千束2-1-1  
TEL 03-3787-1151(代表)

ホームページ: <http://www10.showa-u.ac.jp/~denthp/index.html>

## 東日本大震災における昭和大学の医療救援活動 —歯科の救援活動について—

口腔リハビリテーション科 科長 高橋 浩二

今回の未曾有の東日本大震災に対し、昭和大学は被災4日後の3月15日から4月15日までの一か月間、第1次派遣隊から第7次派遣隊まで医学部・歯学部・薬学部・保健医療学部を擁する医療総合大学であるからこそできる複合医療チームとして岩手県山田町で医療支援を行い、歯科からは第2次から第6次まで参加しました。

山田町地区では本学のほか、日本赤十字病院の各地区からの医療チーム、国立病院機構の各地区からの医療チーム、和歌山大学医学部チームなど10以上の医療チームが支援していましたが、歯科医師を含むチームは初期には皆無で、また医師数、コメディカル数も昭和大学チームは他の医療チームを遥かに凌駕しておりましたので、全医療チームと毎晩行われる合同報告会での協議の下、山田町地区の医療活動の中心として本学医療救援隊は活動しました。

本紙の3月号で第2次派遣隊としての私の歯科活動を報告させて頂きましたが、今回は歯科病院だより4月号全てを東日本大震災における昭和大学の歯科救援活動についての特集号として、歯科からの派遣隊員の報告を掲載したいと思います。なお歯科病院スタッフ、歯学部スタッフから今回の救援活動に是非参加したいと多くの派遣志望者が集まり、私がおります口腔リハビリテーション科でも私や講師、員外助教、大学院生など4名が即日名乗りを挙げましたが、極めて限られた者しか行けませんでした。しかし、行かれなかった方々は参加

者の後方支援として歯科病院における代診診療業務、被災地への必要物資の調達など現地活動以上に多くの支援活動をして下さいました。心より感謝申し上げます。

3月30日の読売新聞の記事をご紹介します。



医療ルネサンス No.5050 緊急連載 震災の現場から ⑥

### 口内ケアで感染症予防

避難所暮らしで気をつけなければならぬのは、水や歯磨き粉不足から十分な歯磨きができません、口の中で細菌が繁殖してインフルエンザや肺炎、胃腸炎といった感染症を引き起こすことです。

岩手県山田町で避難所の一つとなった武道場は、震災直後から9日間にわたり断水した。この間、被災者には500リットルのペットボトルが1日に1〜2本配られただけだった。町内で独り暮らしをしていた女性(79)は「歯磨きに飲み水をたくさん使わなくてもいいから、少し口に含んでおくだけでいい」と語る。顔を洗うのも雪を解かして濡らせたタオルで拭くだけだった。

昭和大学歯学部教授の高橋浩二さんは医療支援チームの一員として震災9日目から同町内に入り、6か所の避難所暮らしで「口内ケア」の大切さを訴えた。「自由に水が飲めず、歯磨きもやっていないと、口の中で細菌が繁殖しやすくなる。避難所生活では、栄養状態の悪化や睡眠不足、ストレスも重なり、感染症を引き起こします」

高齢者にとって怖いのが「誤嚥性肺炎」だ。細菌の多い唾液や食べ物などが誤って気管に入ると、磨き終わってからの唾液は必ず吐き出す。入れ歯の手入れにも注意が必要だ。町立山田南小学校に避難している女性(70)は「周囲の目を気になり、入れ歯の汚れはティッシュで拭き取るだけにしていた」と打ち明ける。避難所ではブライベイト空間が少ないことから、人前で入れ歯を外すことをためらい、装着したままという人も少なくない。就寝前には入れ歯を必ず外し、歯ブラシを細かく動かして磨く。入れ歯に熱湯を注ぐ人もいるが、変形してしまう恐れがある。

「あ」「い」「う」と大きく口を開けて1日10回以上声を出したり、舌を前や左右に最低10秒突き出した後、磨き終わって入れ歯の手入れにも注意が必要だ。町立山田南小学校に避難している女性(70)は「周囲の目を気になり、入れ歯の汚れはティッシュで拭き取るだけにしていた」と打ち明ける。避難所ではブライベイト空間が少ないことから、人前で入れ歯を外すことをためらい、装着したままという人も少なくない。就寝前には入れ歯を必ず外し、歯ブラシを細かく動かして磨く。入れ歯に熱湯を注ぐ人もいるが、変形してしまう恐れがある。

「大きく口を開けて、声を出してください」と被災者に口内ケアを指導する高橋さん(左)

読売新聞 3月30日より

### 第3次 昭和大学医療救援隊に参加して

第3次救援隊員として岩手県山田町における医療活動に参加しました。歯科医療支援は県立山田病院、山田北小学校、山田南小学校、織笠コミュニティセンター、織笠小学校、善慶寺の6か所で行い、ニーズに合わせて1日3か所程度で活動しました。

歯科支援活動内容は、歯科急患対応が主で、他に衛生状態や栄養状態によるものなのか、口腔内環境が悪化している方には口腔衛生指導を行いました。支援活動は日中であるため老人や子供以外は仕事や片付け、搜索活動のために歯科治療を受けたくても受けられない方が多いことが推察されましたが、中には仕事などの合間をみつけて、治療を受けに来られた被災者もいました。山田南小学校、織笠小学校には歯科治療を行

うことのできる専用スペースがありましたが、その他の場所では、専用スペースがなく被災者からも避難所内では治療を受けたくないという意見もあり、校庭で診療を行った例が一件ありました。歯科治療は、例えば義歯調整する際には粉塵やごみ、感染性廃棄物、鋭利なごみ等が多量に出ることや重量のある器具や材料があり、治療を受ける被災者だけでなく、周囲にいる被災者への配慮や機器の運搬等たいへんな面もありました。どれだけ被災者に対し貢献できたかという、期待に答えられないものも多数あったのではないかと思います。

(歯科補綴科 阿部 有吾)



山田北小学校

### 第4次 昭和大学医療救援隊に参加して

3月27日～4月1日までの期間、昭和大学医療救援隊第4次派遣隊の一員として岩手県山田町に行っていました。震災後約2週間が経過し、ライフラインは徐々に復旧していましたが、私たちが宿泊させて頂いた県立山田病院は遅れていたため、第4隊はライフラインが整っている山田南小学校をお借りしてベースキャンプの引っ越しをしました。車のガソリンも枯渇している中で作業でしたが、事務の方、山田町のご好意で何とか引っ越すことができ、その後の活動がとても効率的になりました。

町内の歯科医院はすべて崩壊し約4000人の避難者に対して歯科医師は私1人でした。当初の活動は、医科の往診に同行しながらスタートしました。保健師さんを通して各避難所の声を聞くと、想像以上に歯科治療のニーズがあることが分かりました。とりわけ義歯を紛失された方が多く、慢性的な低栄養を防止するために、即日で義歯を製作する必要があると考えました。(詳細は丸茂先生が後述)。したがって第4隊の歯科医療支援は、①従来までの往診から、保健師さんの協力を得て、外来診療を行うスペースを設けること、②他の歯科医療チームと連携して義歯以外の診療をやっていただくこと、を私の課題としました。①に関しては、自衛隊、岩手県歯科医師会、町の保健師さんなどと協議を重ねて、昭和大学の歯科は高校の保健室をお借りして診療できることになりました。それにより1日に最大3個ほどしか製作できなかった義歯が、最終的には第6隊では、自衛隊の技工士さんの協力のもと40個程度の義歯を製作することができたと伺っています。このことから、歯科衛生士はもちろんのこと、歯科技工士が被災地で果たす役割は大きいのではないかと考えております。②に関し

ては、岩手県の歯科医師会がタービンやユニットを備えた往診車で診療を開始し、義歯の作成以外はそちらに任せて連携して診療にあたったとのことでした。

今回急な出発であったにもかかわらず、多くの先生から差し入れをいただきました。カイロや乾電池にとどまらず、防塵マスクやニーパット、当科に至っては第6隊出発時に即時義歯用の人工歯列まで作っていただきました。当たり前のことですが、まさしく昭和大学全体で成し得た医療支援活動であることを改めて実感した次第です。また、どの隊も同様だと思いますが、第4隊も「また同じメンバーと一緒に仕事をしてみたい」と言う人が出てくるほどチームの雰囲気がよく、同行したボランティアの学生も、「よく授業で“チーム医療”というけれど、臨床実習などではなかなか実感できなかった。しかし、この被災地でのボランティアに参加してその意味がよく分かりました。」と感想を述べていました。

最後になりましたが、急に派遣が決まったにも関わらず、快く送り出してくれた患者さん、医局員、関係各位に心より御礼を申し上げます。「昭和大学として地域に貢献する」という同じ目的を持った仲間と団結して活動させて頂いたことに改めて感謝している次第です。あのような状況で、自然に各職種が専門性を実践し、なお且つお互いが助け合うという医療の原点を見たような気がしました。

(高齢者歯科 内田 圭一郎)



山田北小学校

## 第5次 昭和大学医療救援隊に参加して

昭和大学医療救援隊として3月31日から4月5日までの日程で岩手県宮古市山田町へ行ってまいりました。隊のメンバーは医師4名、歯科医師2名、薬剤師2名、看護師5名、事務1名でした。3月11日の東北地方太平洋沖地震から3週間程経っていましたが、現地はまだ津波で流された家屋や漁船などが町を覆っていました。歯科の活動拠点は前任者の内田先生の御尽力で山田高校の保健室に歯科ブースが設置され、そこで被災された方の歯科診療を行いました。歯科診療といっても簡易的な設備で照明も暗く応急処置を行う形でした。

私達のためにいろいろと心を配っていただいた保健師さんも被災され家を流されたとのことでした。それでも保健師として被災され山田高校の体育館にいらっしゃる600名の方々の健康管理を必死で行っていました。いまにも泣きだしそうな目をされていたのですが、気丈に働いていました。

町には、御高齢の方が多いため主に義歯の修理で受診される方が多かったです。歯ブラシや義歯ブラシを配布し同行した口腔衛生学教室の石田歯科医師と口腔

内の清掃(歯磨き)や義歯の清掃について説明し、口の中に細菌が増えると肺炎などの病気を引き起こすことをお話しました。3つの避難所を巡り10分程度で若手のメンバーを中心に高血圧について注意することを講演いたしました。慣れない避難所生活や辛い状況のため一時的に血圧が上昇する方が多いためです。皆さん大変な御心痛と御苦勞の中、私達の話をよく聞いてくださり拍手もしていただき、頭がさがる思いでした。山田南小学校の4年1組の教室で寝起きしたのですが、硬い床に薄いマットと寝袋で過ごし帰ってきてからも身体が痛く、体育館で1ヶ月避難所生活の方々の身体も限界に近いのではと思います。今回本当に微力ですが現地にて少しでもお役に立てたのなら幸いです。この経験を生かし、整った歯科病院での診療や日々の暮らしに感謝しながら精進していきたいと思えます。

(歯内治療科 増田 宣子)



歯科ブース

## 第5次 昭和大学医療救援隊に参加して

私は、3月31日から4月5日まで第5次隊の一員として活動しました。私がこの救援隊に志願した第一の理由は「何かしたかったから」です。口で「かわいそう」「何とかしてあげたい」といくら言っても、行動しなければ意味がないと思っていましたので志願しました。

現地での活動は、第5次隊の方針として「医療を縮小させていく」というものがあつたので、共に行つた歯内療法科の増田先生とも話し合った結果、「新たな患者の掘り起しはしない」というものになりました。自分は口腔ケアセンターの一員として、日々口腔ケアや摂食機能療法に携わっているので、当初この方針には若干の違和感がありましたが、現地で活動をしているうちにこれが正しいことだと肌で感じる事ができました。

実際の治療内容やその活動内容の詳しい点などは他の先生方に譲るとして、私は自分が体験した中で一番苦勞したことをお伝えしたいと思います。それは、「地元歯科医師・歯科医師会」との連絡作業でした。第5次隊の方針＝「縮小」は、医療を引き継ぐ先があつて初めて成り立つことであり、歯科においてもそれは同様でした。詳しくは割愛しますが、日々情報が移り変わり、昨日当たり前だったことが今日は違つたりしていました。現地での混乱を考えれば当然のことと言えば当然なのかもしれませんが、それに振り回されてしまう患者さんのことを考

えると憤りを感じずにはいられませんでしたし、悔しくて仕方ありませんでした。その後状況が好転していることを切に願うばかりです。

実際に現地で活動をし、被災者の方々からある種の思いを託され、それを伝える義務がある人間として思うことは、被災地から遠く離れた我々にできることは、「決して忘れないこと」だと思います。あと1か月もすれば、報道もあまりされなくなるとは思いますが、そうなつた時にも決して忘れないことが大事だと思います。かといって、いつまでもクヨクヨするのではなく、元気な人がより元気になって、その輪を広げて被災地に届けることが必要だと思います。自分は決して「いい人」と思われたくはないし、「いい人ぶつてる」とも思われたくはありません。たとえそう思われようとも、少しでも「やろう」と思う人間が増えてくれればそれがすべてだと思います。

最後にはなりますが、学務等で多忙の中、私を快く送り出してくれた向井教授、並びに口腔衛生学教室の皆様、そして私を選んで下さつた宮崎学部長に感謝の意を表してこの文章を終わらせていただきます。

(口腔衛生学教室

石田 圭吾)



避難所での講演

## 第6次 昭和大学医療救援隊に参加して：「仮の入れ歯」作り

4月4日～10日までの期間、昭和大学医療救援隊・第6次派遣隊の一員として岩手県山田町にて活動してまいりました。震災から3週間あまりが過ぎ、ライフラインが徐々に復旧するなか、全国から届いた救援物資の配給が日に2回は行われていました。私も現地に到着した夜に配給をいただきました。大勢をまかなうために、食材は大きめに切り分けられていて、お米はおにぎりでしたので、入れ歯をなくされた方はどうやって召し上がっておられるかがとても心配でした。

医療支援は昭和大学のほかに約10チームが参加し、40あまりの避難所や在宅での活動を行っていました。多い病気は慢性疾患(高血圧・糖尿病など)の他に、不眠や不安に加え、胃痛や便秘を訴える方が多数いらっしゃいました。生活環境の変化によるストレスだけではなく、入れ歯のない方が食事を丸呑みしているうちに体調を崩されるということは歯科医師だからこそすぐにわかりました。

翌4月5日の朝から歯科診療を始めるにあたり、保健師の方をお願いして、入れ歯を紛失された方に「仮の入れ歯」を作れることをお知らせいただきました。

「仮の入れ歯」とは阪神淡路大震災時の救援活動で考え出された方法で製作され、強度と見た目の良さは落ちますが2ヶ月ほどは使用できるものです。通常は入れ歯を作るのには5～6回の受診と100時間を越える工程が必要となりますが、この方法ならば2回にわけ2時間ほどで完成できます。

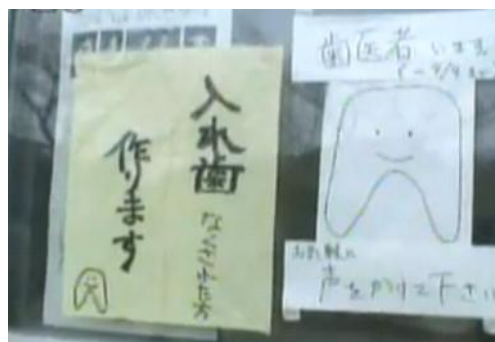
岩手県の歯科医師会も歯科の支援活動を4月に入り行っていたのですが、被災地が広域すぎてカバーしきれっていませんでした。さらに、「仮の入れ歯」を作れるのは、山田町では昭和大学しかなく、多くの方が受診されました。しかし6日の夜11:30頃震災後最大の余震があり、停電。7日は朝になっても停電のまま、途方にくれましたが、航空自衛隊の歯科チームが到着し、発電機を導

入していただいたおかげで無事に診療をすることができました。そして、人手が増えてさらに多くの入れ歯を作れるようになりました。

また、被災地で千葉県から参加された全国在宅歯科医療・口腔ケア連絡会と神戸常盤大学の先生、岩手県歯科医師会の主催する診療チームともお会いでき、それぞれの得意分野(口腔ケア、虫歯の治療、入れ歯)で活動を続けようと語りあいました。

現地では、活動を行っている人も、遠くから支える人も1つになり、被災地を支援していこうという絆を感じました。復興までの長い道のりを乗り越えるために、力を合わせてがんばりましょう。最後になりましたが、1週間も派遣をお許しくださいました関係者、患者様に心より御礼を申し上げます。

(高齢者歯科 丸茂 実希)



手描きの広報



製作した「仮の入れ歯」



診療しているところ

## 編集後記

今回、歯科病院からは歯科医師に加え、調理師の高橋 敏さん、医事課職員 小野寺 正則さんも救援活動に参加されました。高橋さんには総勢18名の二次派遣隊の食事のお世話(ごく限られた設備で各自にお弁当まで!!)をしていただき、また小野寺さんは第五次隊の現場での後方支援(物資調達から全てのコーディネートをするので医療スタッフより実はたいへんな仕事)をされました。また今回の震災では人間はもちろんですが、家畜からペットまで人間を支える動物達にも大きな被害が出ていることは皆様ご存知のことと思います。歯学部教授総会では4月20日に日本動物愛護協会や日本獣医師協会が主催する緊急災害時動物救援本部の活動に賛同、協力することを決め、今後募金活動などを行う予定です。

皆様とともに東日本を支援しましょう。立ち上がれ日本!!

(K.T)